熊本県文化財調査報告　第３２２集

志　柿　城　跡

― 江川防災・安全対策等緊急工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 ―

熊本県教育委員会

２０１６

志柿城跡

熊本県文化財調査報告　第322集　二〇一六　熊本県教育委員会

PL.1　空撮　志柿城とその周辺（SW→）

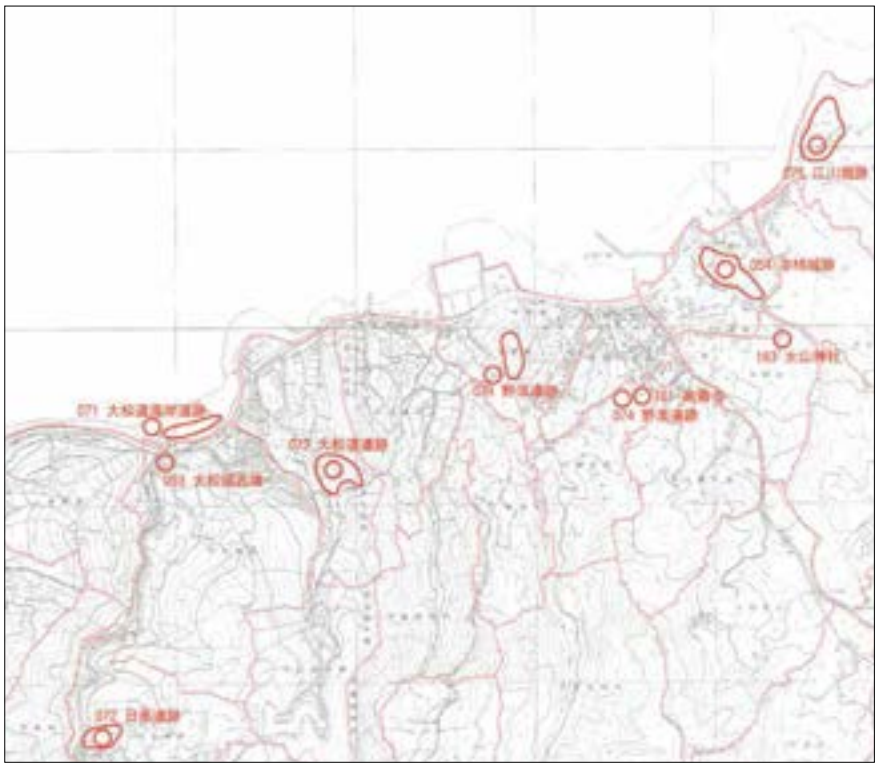


Fig.1　志柿城跡 周辺の遺跡

序　　文

熊本県教育委員会では江川防災・安全対策等緊急工事に伴い、志柿城跡の調査を実施しました。天草地域における中世城は多くの研究者の調査により５０を超える城跡が確認されています。中でも天草市久玉町に所在する「久玉城跡」は、昭和４８年にはじめて県指定第１号となりました。また近年では平成２１年に倉岳町の棚底城跡が国史跡に指定されるなど、これまでの調査・研究がしっかりと結びついております。

このような流れのなかで、今回調査を実施した志柿城跡は、合戦の古記録も残る城跡であり、不明な部分が多い天草地域中世期や当該城跡の解明に寄与すると考えます。

記録保存という形ではありますが本報告が地域の発展とともに、将来、地域の貴重な歴史の情報として引き継がれ、今後の研究の一助になれば幸いに存じます。

なお、本調査を実施するにあたり、御理解と御協力をいただいた地元の皆様並びに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成２８年3月３１日

熊本県教育長　田崎　龍一

例　　言

1　本書は、熊本県天草市志柿町に所在する志柿城跡調査の報告書である。調査は平成 24 年度～ 26 年度に実施した。

2　発掘調査は、熊本県土木部及び天草地域振興局土木部工務第二課砂防班の依頼を受け 、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、同事業部局が負担した。

3　遺物の整理・報告書作成は、熊本県文化財資料室で平成 27 年度に実施した。

4　本書で用いた遺跡地図は本渡市遺跡地図（2000　本渡市　教育委員会）の掲載図面を掲載し、本文中の遺跡名及び遺跡番号はこれに従った。

5　現地での写真撮影は各調査員が行い、遺構実測は各調査員が実施し、一部を㈱埋蔵文化財サポートシステム熊本支店・㈱ダイチプランの委託事業とした。遺物の実測･製図は、多賀晴司･春川香子･山下義満が実施し、遺物洗浄・接合・復元は文化財資料室で行った。
遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・佐藤典子が行った。

6　遺物は熊本県文化財資料室で保管している。

7　本書の執筆・編集は、熊本県教育庁文化課が行い、春川の援助を得て山下が担当した。

凡　　例

1　**方位／座標／標高**　国土座標第Ⅱ系（日本測地系）を基準とし、方位もそれに準じ、遺跡全体の地区（Fig.3）の通りである。標高は東京湾平均海面（Tokyo Peil［T.P.］）による。

2　**遺構図版　縮尺**　縮尺はキャプション及びスケールで示した。

3　**遺物図版　縮尺**　遺物実測は原寸で行い、2/3 で掲載している。稜線は実線または一点破線、推定線は破線で示した。

4　**遺物観察表**　実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項にて注記している。

5　**色調**　遺物の色調については、大日本インキ化学工業株式会社発行「中国の伝統色」第 2 版（1986）を、土層の色調は「新版標準土色帖」を用いた。

本文目次

第Ⅰ章　調査の経過…… 6
　調査に至る経緯と経過・組織
第Ⅱ章　遺跡の環境…… 6
第Ⅲ章　調査の概要と成果…… 7
　調査区の位置
　調査の成果
第Ⅳ章　総括…… 13
　第 1 節　遺構
　第 2 節　遺物
　第 3 節　結言

表・写真図版

Fig.1　志柿城跡 周辺の遺跡…… 1
Fig.2　天草の中世城 1（位置）…… 8
Fig.3　調査区全体図 …… 11・12
Fig.4　時期不明石積 1 …… 11・12
Fig.5　志柿城跡出土及び表採遺物 実測図…… 16
Tab.1　天草の中世城 2（通称）…… 9
Tab.2　志柿城跡出土及び表採遺物 観察表…… 16
PL.1　空撮　志柿城とその周辺（SW →）…… 1
PL.2　石造物 1 集中区 …… 11
PL.3　時期不明石積 1 …… 12
PL.4　志柿城跡出土及び表採遺物 写真…… 17
PL.5　空撮　俯瞰 …… 17
PL.6　時期不明石積 2 …… 18
PL.7　フォゲット（時期不明石積 1）…… 18
PL.8　時期不明石積 3 トレンチ状況 …… 18
PL.9　時期不明石積 3 トレンチ出土遺物 …… 18
PL.10　石造物 2 …… 18
PL.11　石造物 3 …… 18

第Ⅰ章　調査の経過

調査に至る経緯と経過・組織

今回報告する調査は江川防災・安全対策等緊急工事に伴う調査である。この地は中世期の山城として周知されている。確認調査（平成 25 年 1 月 13・14 日）を行い、平成 25 年 3 月 5 日 教文第 2599 号にて調査を開始した。地形測量を主として石造物を含めた周囲での聞き取り調査等を行った。用地買収が平行して行われたため、２年度に亘り調査を実施した次第である。

調査組織

発掘調査（平成 24 ～ 26 年度）

調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　小田信也（文化課長）　調査総括　　西住欣一郎（課長補佐）　岡本真也（主幹兼文化財調査第 2 係長）　　調査事務局　川上勝美　馬場一也（課長補佐）　廣石啓哉（主幹兼総務係長）　天草英子（主任主事）　調査担当　　山下義満（参事）

確認調査担当　　坂田和弘（参事）　山下義満（参事）　士野雄貴（非常勤職員）　桑島幸平（非常勤職員）

整理・報告書作成（平成 27 年度）

整理主体　熊本県教育委員会

整理責任者　手島伸介（文化課長）　整理総括　村﨑孝宏（課長補佐）　岡本真也（主幹兼文化財調査第 2 係長）　整理事務局　松永隆則（ 課長補佐）　廣石啓哉（主幹兼総務・文化係長）　天草英子（主任主事）　竹馬牧子（主事）　整理担当　山下義満（参事）

調査協力者及び助言者

鶴島俊彦（熊本城調査研究センター）　中山 圭･松本博幸･太田真理子（天草市教育委員会）　江浦久志（天草創磁）

第Ⅱ章 遺跡の環境（中世期）

志柿城は、天草市志柿町に所在し、海岸線に沿う国道 324 号より目視できる環境にあり、本遺跡から有明海西側を眺望できる。これまで本遺跡の存在は踏査等で認識されていた。天草の中世期には諸領主がこの島嶼に存在するが、その一人であろう。この中世期の混沌とした時代に天草には各所に「城」が存在し、中世終末には大矢野・上津浦・栖本・天草・志岐の五氏の所領となり、互いに小規模な合戦を繰り返すが、宇土の小西行長の宇土城普請協力を拒否することを発端として、天正 17 年（1589）加藤清正・小西行長の連合軍と天草五氏は天草において大規模な合戦となり、これに敗北した天草五氏は滅び、これにより時代は中世から近世へと向かう。兜梅（旧本渡市）・仏木坂（苓北町）などの当時の伝説から、その合戦の様相をみることもできる。近世初頭に富岡（天草郡苓北町）に富岡城が築城された以外は天草には城郭が存在せず、従って中世期の城は殆どはその様相を変えずに残存したかたちになる。

前述したようにこの「志柿城」は有明海に面し、海上交易・情報収集等の海を意識した城であったろう。一概に天草の中世城は海岸部に多く所在する傾向が見られる。またこれまでの中世城としての成立・稼働時期を除いた調査成果（Fig.2）を概観すると、旧本渡市北位・五和町周辺、旧有明町の国道 324 号沿いに集中区が見られ、またこのエリアは有明海に接していることも今後の検討課題として提示しておきたい。

第Ⅲ章　調査の概要と成果

調査区の位置（Fig.1 参照）

調査地は国道 324 号に接し、明治 34 年（1901）開通のこの道路に、西端の通称 稲荷山と分断されているが元々は連続した地形であったろう。また調査区は標高 29 ｍの丘状を呈しているが、周囲の田園は近世の干拓に依るもので本来は小島状を呈する。天草上島には それぞれ直線距離で、上津浦氏の居城と推定される上津浦城が北東方面８Km に所在し、また東南方面には栖本氏居城（推定）が６kmにあり、海を隔てて 5Km に天草氏の居城 本戸城など、いわゆる五氏中の三氏がほぼ同等直線距離に近在しているような位置に所在し、この本戸城から志柿城が一望できる。

また江川城（旧本渡市遺跡番号 075）に近接している。この江川城跡の性格は不明であるが本調査の志柿城と同質の性格と推定する。またこの地域は海岸部に大松道海岸遺跡（071）・同じく縄文期の大松道遺跡（073）・古墳時代には横穴式石室を持つ円墳の大松道古墳（053）・野添遺跡（074）など周囲には遺跡が点在している。古来から生活利便性の高いエリアだったのであろう。

調査の成果

本調査は確認調査と踏査により、地形測量を主とした。雑木等の伐採終了後に測量・空撮を行ったが本体工事範囲が限定的であったため、城の中枢である山頂付近までには迫れず南斜面と西端の調査になった。この平場には石造物が点在し、今も地区では信仰の対象となっている。成果の詳細については総括で述べたい。

基本土層はトレンチを２箇所設置したのみであったが中世城の性格上、自然地形を利用しており、したがって表土である耕作土（腐葉土）の下位は頁岩層の地山であった。粉砕し易い頁岩とはいえ岩位層のため、これの手掘りは大汗をかいた。また随所に頭大の砂岩を用いた石積みがみられ、この性格把握のため１ヵ所であったがトレンチを設定した。

本遺跡における基本土層は以下のとおりである。

Ⅰ層　耕作土
Ⅱ層　にぶい褐色土（7.5YR5/3）小粒混じり硬く締まる
Ⅲ層　暗褐色土　（7.5YR3/3）径２～３㎝の粒混じり硬く締まる
Ⅳ層　灰黄褐色土　（10YR4/2）小粒混じり硬く締まる
Ⅴ層　にぶい黄褐色土　（10YR5/3）径２～３㎝の粒の様相　頁岩層

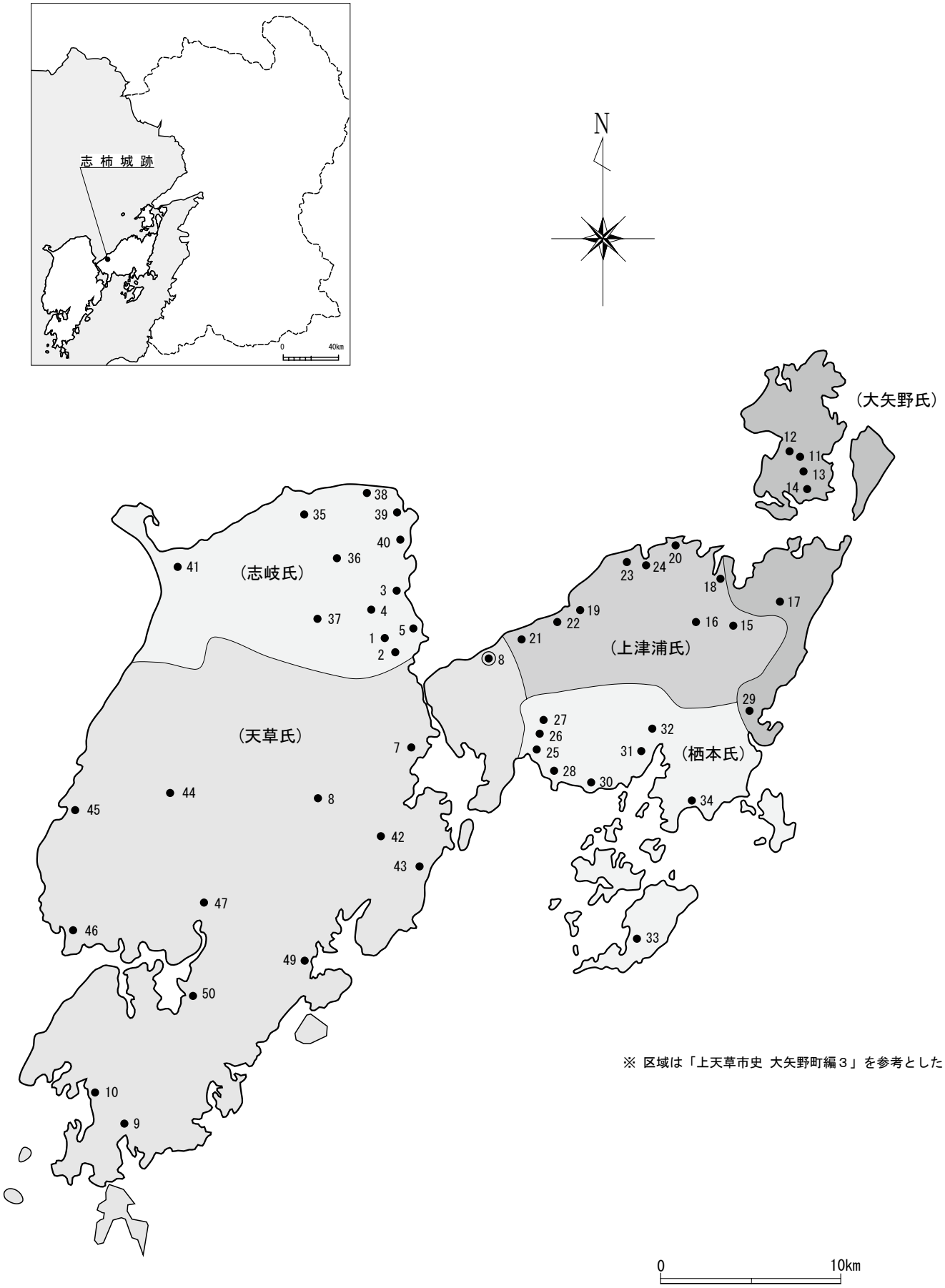


Fig.2　天草の中世城１(位置)

城名と所在地は『天草建設文化史』による

掲載番号	旧・現市町村名	「熊本の中世城」掲載番号	「天草建設文化史」掲載番号	城　名	所　在　地
1	本渡市	1	3	本戸(渡)城・本戸馬場城	本渡市本戸馬場・城ノ平
2		2	4	本戸(渡)城・町山口城	本渡市本渡・城山
3		5	14	佐伊津城・金浜城	本渡市佐伊津・城廻
4		4	15	佐伊津城・在郷城	本渡市佐伊津町風呂迫(高城)
5		3	26	広瀬城	本渡市広瀬・上ノ山
6		8	27	宮地岳城	本渡市宮地岳・林内
7		7	28	楠浦城	本渡市楠浦町・城ノ坂
8		6	19	志柿城・江川城・船江城	本渡市志柿町・江川・高垣
9	牛深市	10	13	久玉城	牛深市久玉・大坪
10		9	35	魚貫城	牛深市魚貫・城ノ下(城山)
11	大矢野町	13	9	大矢野城・中村城	天草郡大矢野町中・城本
12		14	10	大矢野城・上村城	天草郡大矢野町上・浦川(古城)
13		11	48	亀ノ迫城	天草郡大矢野町中・亀ノ迫
14		12	49	柳城	天草郡大矢野町中・城山
15	松島町	16	17	内野河内城	天草郡松島町内野河内・城ノ平
16		17	46	教良木城　城ノ平城・城山城	天草郡松島町教良・城ノ平・小路
17		15	47	合津城	天草郡松島町合津・合の丸
18	有明町	24	11	楠甫城	天草郡有明町楠甫・城ノ首
19		18	8	上津浦城・一之城・二之城	天草郡有明町大字上津浦・谷合
20		23	16	大浦城・船津海城・朝鮮山城	天草郡有明町大浦・勢留・泉
21		20	18	大嶋子城	天草郡有明町大島子・古城
22		21	43	小嶋子城	天草郡有明町小島子・古城
23		19	44	赤崎城	天草郡有明町赤崎・大丸
24		22	45	須子城	天草郡有明町須子・樫ノ戸
25	栖本町	26	6	栖本城・湯舟原城	天草郡栖本町湯舟原・本丸
26		25	7	栖本城・馬場城	天草郡栖本町馬場・松尾
27		28	36	河内城・城ノ平城・矢倉城	天草郡栖本町河内・城ノ平・前田
28		27	37	古江城	天草郡栖本町古江・柱松
29	姫戸町	29	42	二間戸城	天草郡姫戸町二間戸・寺
30	倉岳町	31	38	宮田城	天草郡倉岳町宮田・城山
31		32	39	棚底城・高城・城山城	天草郡倉岳町棚底・尾崎・城ノ平
32		30	40	浦城	天草郡倉岳町浦・城ノ下(城山)
33	御所浦町	33	50	御所浦城	天草郡御所浦・元浦(城ノ上)
34	龍ヶ岳町	34	41	大道城	天草郡竜ヶ岳町大道・城
35	五和町	39	20	下内野城	天草郡五和町下内野・小峰
36		37	21	上野原城・三川城	天草郡五和町上野原下野原・城木場(打越)
37		38	22	城木場城	天草郡五和町南風ノ元(城ノ尾)
38		36	23	宮津城	天草郡五和町鬼池城
39		35	24	大嶋城	天草郡五和町御領・小浦
40		40	25	御領城	天草郡五和町馬場(城内)
41	苓北町	41	5	志岐城・城之平城・城山城	天草郡苓北町・城之平・城山
			51	富岡城・臥龍城	天草郡苓北町富岡・本丸
42	新和町	45	12	宮地城・小宮地城・大宮地城	天草郡新和町小宮地・城ノ平・陣ノ内
43		46	29	大多尾城	天草郡新和町大多尾・城ノ平
44	天草町	44	31	福連木城	天草郡天草町福連木・山神(城山)
45		43	32	高浜城	天草郡天草町高浜・森分(城ヶ岳)
46		42	33	大江城・城ノ尾城・陣ノ内城	天草郡天草町大江・尾崎・陣ノ内
47	河浦町	47	1	河内浦城・下田山城	天草郡河浦町下田・城山
48			2	河内浦城・下田海城	天草郡河浦町下田湯立免(古城)
49		49	30	西高根城・海城・山城	天草郡河浦町宮野河内・蔵ノ浦・船津
50		48	34	路木城・小見山城	天草郡河浦町路木・富田

Tab.1　天草の中世城 2 (通称)

PL.2　石造物 1 集中区

PL.3　時期不明石積 1

Fig.3　調査区全体図

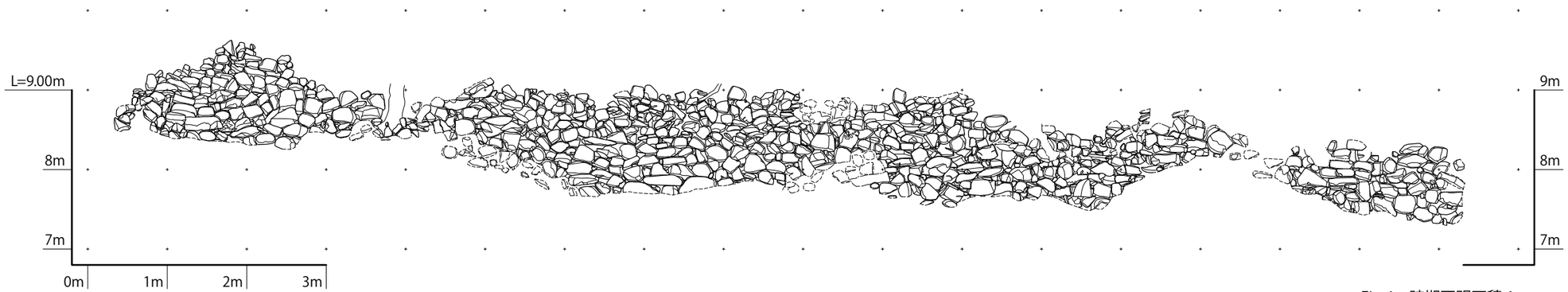


Fig.4　時期不明石積 1

第Ⅳ章　総括

第１節　遺構

本調査は地形測量を中心として、２カ所のトレンチ掘削を実施したが明確な遺構の検出は認められなかった。トレンチ設置場所は以前、畑地として利用されていた場所であり、Ⅲ層から近・現代（明治～昭和）の磁器片が出土していることから、当該期の耕作を示す証拠といえる。この地が当時のものか、中世期の「志柿城」であったならば、その中心地は頂上付近の平坦な範囲であろう。今回の調査は急傾斜地工事に伴う文化財調査のため、その工事範囲が調査の対象地であり、平坦地の存在は確認できたが、これが後世の耕作に伴うものか判断ができなかった。しかし、平坦部が当時の旧地形を残している可能性が高いため現地形の測量調査を中心として、トレンチ調査等を実施した。この志柿城は自然地形を利用した山城であるため、登城等の道が存在するはずである。今回の調査で山頂への道がこれに掛かったが、現在も頂上付近への農耕道として使用されており、当時の使用された道とは断定できなかった。また調査区に頭大石を用いた石積みが数カ所確認でき、これらは近世以降の石積みと考えられたが、天草市教育委員会の意向も踏まえて一部を記録し後世に残すことにした。

第２節　遺物

平坦部の確認調査を実施した２カ所のトレンチから出土した遺物及び主な表採遺物について所見を述べる。中世輸入磁器片（青磁）・近世中期肥前系磁器片・昭和前期の在地窯の破片（水の平焼）が出土した。聞き取りにより近年までの耕作が行われていた。

また、段々畑を形成する石積みにも確認トレンチ（Fig.3 参照・PL8・9）を設定した。この地から江戸中期の肥前系産の筒型碗　通称「コロ茶碗」の破片の出土により、これらの石積みは天草の江戸期の耕作、いわゆる「耕して 天に至る」状況を物語る遺構である。肉眼観察では砂岩を中心としているが、数個ではあったが波の浸食を残す砂岩も見られることから海岸より採集したものであろう。出土したこの茶碗類の容器は生活の根本をここに置いたのではなく、農耕の休息時に使用した物であろうか。近年まで天草は、ごく一部の富裕層を除いて茶をのむ習慣は稀で、通常は白湯であった。これは在地窯での急須の作成時期を辿れば、一層　明白である。また小皿・お神酒徳利など信仰に関する遺物の出土・表採から後述する信仰が存在したことを推定できる。

第３節　結言

１　資料より（文献・聞き取り）

結言にあたり、地元誌に興味深い記述がある。

文献　１〔『ふるさと誌　志柿』 1992　志柿老人クラブ連合会 〕

（１）薬師堂・千人塚

船江城の南約 200 mの平坦地に、昔は薬師堂と千人塚があった。幾千の武士の屍を埋めた所と伝え聞く。（志柿村誌より）

（２）船江城（ふなえん城）

志柿小学校東北 100 mの所に小丘陵がある、東に船江川が流れ、北に有明海があり、西に入江が現在の小学校付近まで入り込み、当時としては絶好の城塞であったと思われる。

明治三十四年県道が開通し､稲荷山との間を掘削した時､一振の太刀（その中央より斜めに切断された錆刀）が出土している。また周囲の畑の整理を行った際『かわらけ』を堀出した。共に当時の小学校長平田鶴松氏がこれを小学校理科室に保管したと、言われているが、現在小学校を調査したが改築等により行方は不明である。

尚門柱、門標等もあり、黒糸縅の鎧も掘り出したが、作業員が暖をとる為に焼却したという。頂上付近に空堀が掘りめぐらされていたが、明治になり畑にする為に埋められたという。頂上には牡蠣殻の着いた石が多数あり、戦の時武器として使用されたのではないか（宮崎英治氏 談）

この文献 1から、

A 明治三十四年県道が開通し、稲荷山との間を掘削

B 頂上付近に空堀が掘りめぐらされていたが、明治になり畑にする為に埋められた

A ´ これにより、志柿城と稲荷山は連続した地形であった。このことは本来の志柿城の範囲が稲荷山までの西側海岸線まで延びることになり、海上に突き出たような小島状の地形となる。

B ´ どの地点に空堀が存在したかは不明であり、今回の調査の対象外であるが城としての機能を備えていたことになる。

文献 2〔『八代日記』 1980 高野和人 〕

志柿の記述

ここで中世の天草の様相を知る資料『八代日記』の志柿について表記したい。

C 天文廿年 辛亥（1551 年）

十二月十四日 大矢野氏八代ニ着候 御会尺竹下五良三郎方ニて、大矢野殿ヨリ條数、（略）志柿之事（略）

D 永禄八年 乙寅（1565 年） ※ 栖本氏知行（鶴嶋 2009）

二月廿三日 庚申 天草殿ヨリ し（か カ）の き ニ動、長嶋彼留守、和泉（出水）ヨリ知行、

同 廿四日 和泉ヨリ長嶋ニ働候て、彼地和泉ヨリ知行、時義（宣）ハ し（か カ）の き 働之通栖本ヨリ和泉与力、長嶋人躰其女中、和泉衆ふせき候て是又打死、

六月九日 天草大矢野上津浦 三人ニテ志柿ニ動候、栖本衆ト上津浦ト合戦、上津浦衆六人打死

九月十七日 志柿ニ着陣 求麻衆・天草衆同前、八代衆ハ廿一ニ番立候 ※天草氏知行（鶴嶋 2009）

文献２により C～Dの記述より、志柿の地は『八代日記』時期には合戦場となる境領地（栖本氏・天草氏）の性格を持つようである。

聞き取り

ここには（調査区西端平場）、城の墓があり、合戦で亡くなられた人を祀っている。数年前にこの城にまつわる人が訪ねてきて、「安心した。」という言葉を呟かれた。（ 収録 平成 25 年 12 月 12 日 ）

２ 天草五人衆

ここで一度整理しておきたいのが、「天草五人衆」という呼称である。中世の天草の文献には当時の領主が相まみえる。大矢野氏・栖本氏・上津浦氏・天草氏・志岐氏である。この五氏が天草に存在していたことは中世文献から明らかであるが、古くは宣教師 フロイスが記した書物『日本史』には「五人の殿」との記載があり、江戸後期の天草郡高浜村庄屋 上田宜珍が記した歴史書「天草島鏡」が記載された『天草郡史料』(1914)には「五人の守護職」や「天草一黨五家」との記述がある。また前書の『八代日記』には「天草衆」との表現が見られ、これ以前の混沌とした時期に領主級は、「天草八人衆（上記の五氏・宮地氏・久玉氏・長嶋氏)」と郷土史に見られる。やがて「天草八人衆」から「天草五人衆」へと変遷を遂げるのだが、前述した記録類には表記として「天草五人衆」という記述が見られないことから、昭和前期の在地郷土史家の表記が通称化したのであろう。最近の研究論考では「天草五氏」という表現も見られる。

３　志柿城の位置付け

本調査においては、考古学上での「城」としての明確な成果は上げることはできなかった。それは本調査地が急斜面工事に伴うものであり、城の中核地に迫ることが出来なかったためである。頂上付近に郭らしき平面地は存在し、何れ詳細な調査の必要が生じるだろう。

今回の調査において城としての認識史料は、

・調査西端の平場に石造物（春日大明神）や宝塔の宝珠が存在。

・地区に合戦等の記録『八代日記』、伝承。

・周囲に城関連の字、微小地名（陣の嶽）。

・確認調査にて中世輸入磁器片の出土。

などを根拠とした。この志柿城は地元では「船江城」（ふなえん城）と呼ばれていた。現在では「志柿城」として遺跡地図に掲載されている。またこの標高 29 mの独立丘である志柿城は田園地帯の中に存在するが、干拓以前は岬状の長崎を形成していたのであろう。現在でもこの志柿城から有明海西部を眺望することが出来、海の砦のような性格を持っていたのではないだろうか。前述した五氏の居城と推定されているのは、いずれも海に近接していることから、交易・監視等を含めた海上の支配に重点においた、時期によっては境目領地の性格を持ち、戦略上でも重要な地点であったことが想定できる。

また本調査の「志柿城」の地名「船江」（ふなえ）の発生がどこまで遡れるかは困難であるが､そもそも「フネ（船）が接頭して複合語をつくる時にフナとなる・江は地名用語で入江の江のこと」（地名語源辞典 1968）であるため、これから船舶・小港の存在を想定させる。またこの志柿城の範囲は国道 324 号の西側の丘状もこの範囲と考える。従って大胆ではあるが、この志柿城は監視と船を係留する機能を備えた中世期の城の一つと考え、前述したように戦略上の重要拠点であったろう。今回の調査は志柿城跡１次調査と位置付けられ、今後天草の中世城については、これまでの研究成果を踏まえ、その機能と性格を含めた詳細且つ総合的な調査・研究が望まれる。

参考文献

『天草郡史料』1914　天草教育会

『天草近代年譜』 1947　松田唯雄

『熊本県の中世城跡』 1978　大田幸博　熊本県文化財調査報告　第 30 集　熊本県教育委員会

『天草建設文化史』 1978　社団法人 天草地区建設協会

『八代日記』 1980　熊本中世史研究会

『ふるさと誌　志柿』 1991　志柿老人クラブ連合会

『本渡市史』 1991

『本渡市遺跡地図』 2000　本渡市文化財調査報告書　第 9 集　本渡市教育委員会

『戦国相良の天草外交の城郭』 2009　鶴嶋俊彦　ひとよし歴史研究 12 号

『天草鶏助史』 2012　鶴田倉造

『上天草市史 大矢野編３』 2005　上天草市

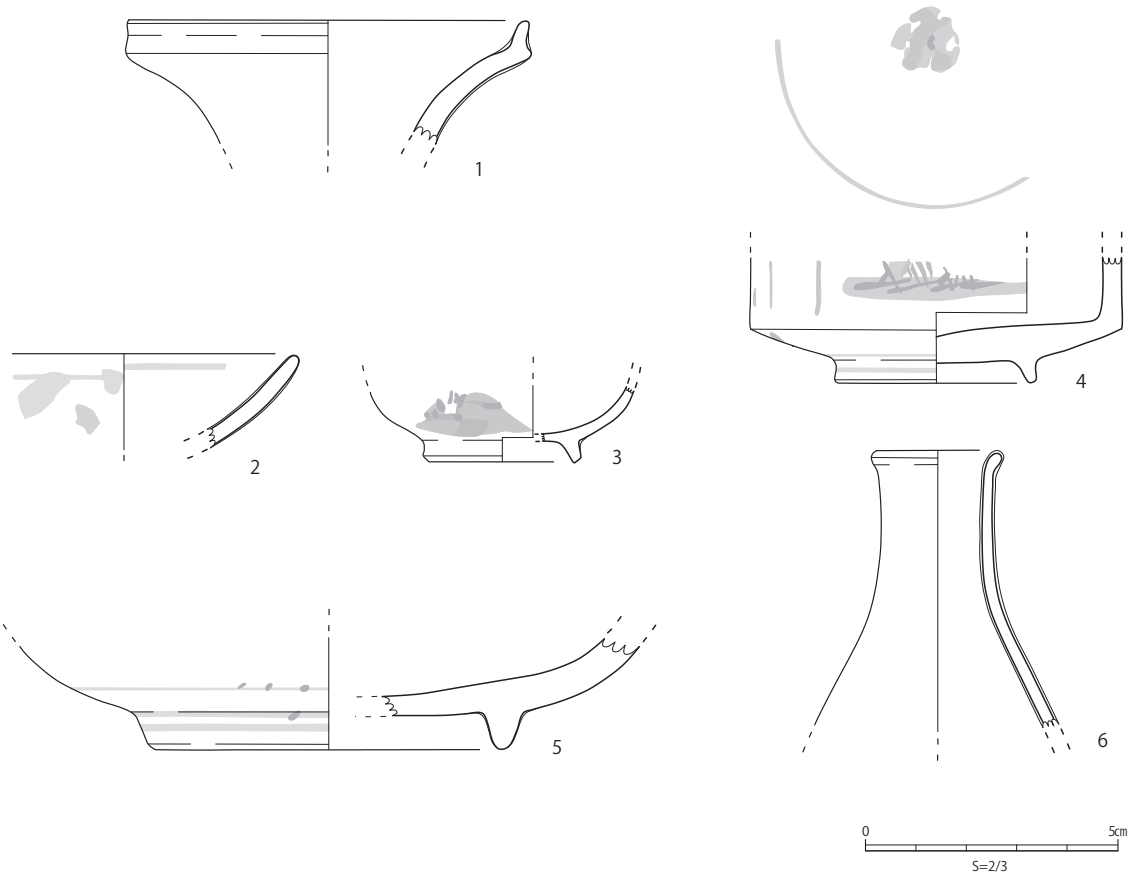
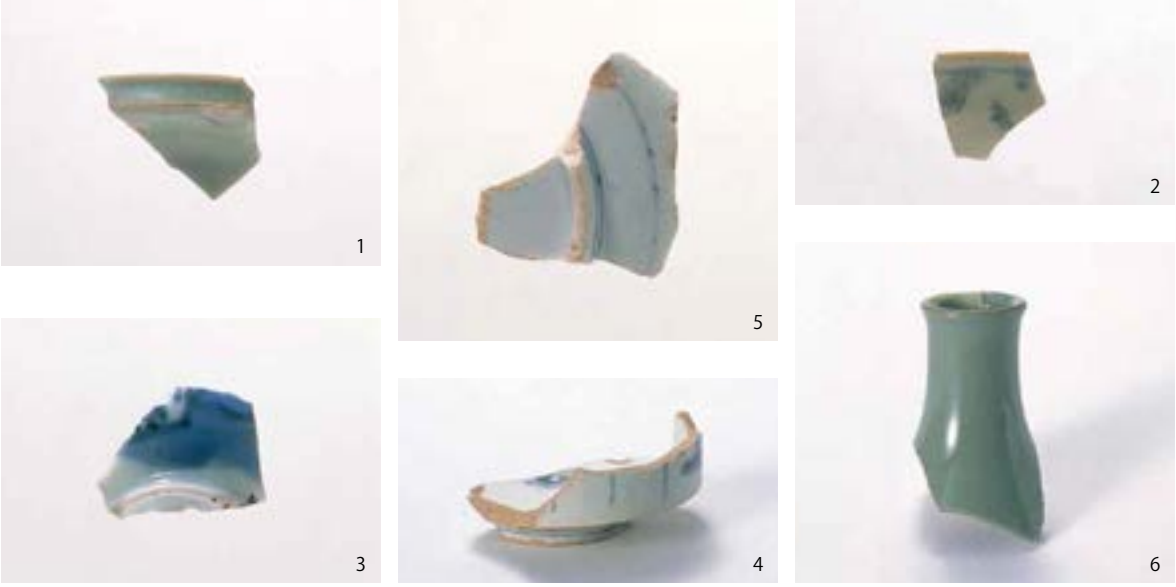


Fig.5　志柿城跡出土及び表採遺物実測図

報番	出土地点	種別	器種	法量 (cm)		調整	色調		胎土	残存	備考
				口径	残高		施釉	胎土			
1	T No.1 2層	青磁	瓶	(7.9) 復元値	2.5	回転ナデ調整 施釉	C-241 雲の灰色	C-144 灰白	精良堅緻 風化、よごれのため黄ばんでいるがやや灰色みのある白色と思われる　微細な白色の粒が点々と入る	口縁 1/8	施釉の厚いところは青みのある灰緑色 やや失透色だがくすんでいる印像はない 龍泉窯。
2	表採	青花	皿 蓋？		1.9	回転ナデ調整 施釉	C-211 鉛の灰白	C-163 貝の白	灰白色で白い微少な粒がわずかに見えやや粒状感あり	口縁 1/12	施釉は少し青みを帯び白濁した感があり 微少な白い粒がある　絵はぼやけて見える 江戸中期肥前系手塩皿
3	表採	染付	小杯		1.5	回転ナデ調整 施釉	C-281 藍白	C-164 亜鉛華の白	精良堅緻　白い	高台 1/6	施釉のたまりは青みを帯びる 外面は厚みがわかるほどであるが 胎土の白さがよく分かるくらい透明 在地窯の古高瀬焼。 高台径 2.9cm
4	T-4 No.1 (断面) 埋3層	染付	筒型碗		2.5	回転ナデ調整 施釉	C-281 藍白	C-164 亜鉛華の白	精良堅緻 わずかに粒状感あり 破面、黄ばんでくすみ強い 欠けているところは白色	底部 1/3	目で見て釉の厚みがわかるところは少ない こくわずかに青みがかった透明釉 呉須の発色良 最大幅（底径）7.2cm　高台径 3.8cm 肥前 18C
5	T No.1	染付	皿		2.2	回転ナデ調整 施釉	C-282 雪の灰白	C-164 亜鉛華の白	黄ばんでいる わずかな欠けの部分は白色 精良堅緻	高台 1/9	施釉は目でわかるくらいの厚みがある そのためかわずかに青みがある 外面に3本の圏線と点状のものがある 高台径 6.9cm
6	T-4 No.2 3層	青磁	蓋徳利	2.4	5.5	回転ナデ調整 施釉	C-223 海老の 灰青	C-243 灰青	精良堅緻 うすい灰色でややガラス質 白い微小な粒状のものが入る	口縁 2/3	施釉は全面に厚く施釉　外面の方が厚い 施釉がたまる口縁部ではたまっているところのほうがやや色調が薄くなる 釉厚が薄いところはわずかに黄みを帯びる その他は均質なやや深い青磁色 近代作　機械離離。

Tab.2　志柿城跡出土及び表採遺物観察表



PL.4　志柿城跡出土及び表採遺物写真

PL.5　空撮　俯瞰

PL.6　時期不明石積 2

PL.7　フォゲット（時期不明石積 1）

PL.8　時期不明石積 3 トレンチ状況

PL.9　時期不明石積 3 トレンチ出土遺物

PL.10　石造物 2

PL.11　石造物 3

報告書抄録

ふりがな	しかきじょうあと
書名	志柿城跡
副書名	江川防災・安全対策等緊急工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第３２２集
編著者名	山下 義満
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
発行年月日	2016 年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
志柿城跡	天草市志柿町	２０７	０５４	32°　27′30	130°　14′	2013 年 5 月 1 日～ 2016 年 12 月 26 日	約 2,000 ㎡	工事に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志柿城跡	城	中世		輸入磁器 近世磁器	

要約

志柿城跡は周知の中世城であるが今回の調査地は、全体的に後世の削平を受け明確な廓などの確認は困難であった。平坦地が当時の旧地形を残している可能性が高いことから、現地形の測量調査を中心としてトレンチ調査等を実施した。また事業予定地内にある近世以降と考えられる石垣は、天草市教育委員会の意向も踏まえて一部を記録保存とした。本調査は急斜地の部分的な範囲であり、確認調査での中世輸入磁器の出土・伝承・古記録などから中世期の山城として再確認された。尚、本遺跡の性格については、今後　山頂部に想定される主郭等の詳細な調査を求められる第一次調査として捉えられる。

熊本県文化財調査報告　第３２２集

志柿城跡

― 江川防災・安全対策等緊急工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 ―

平成 28 年 3 月 31 日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印刷　株式会社 有明印刷

〒865-0022　熊本県玉名市寺田 123-1

発 行 者：熊本県教育委員会
所　　属：教育総務局文化課
発行年度：平成 27 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第３２２集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：志柿城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦２０１７年１０月５日